裏日本道路改良宣傳旅行記（上）

一記者

出發

初めの豫定では十月七日午後八時四十分に一同東京驛を出發する筈であつたが、擔任事務の都合やら汽車などの關係で、中川理事は堀書記を隨へて六日午後八時四十分に先登を、次いで茂庭博士、佐藤、都筑兩幹事は七日午前九時半の特急にて、また殿軍として武井幹事が東島書記と同日夕刻品川驛から追つ驅けるといふ三段の出發になつた。

六日の夜は、例の乘合自動車訓令問題で田中幹事が前代未聞の變挺な譴責を食つたので佐藤、都筑兩幹事は日比谷外の花の茶屋に田中幹事を招いて慰問祝ひといふ盃を擧げ深更まで痛飲したのであるが、翌朝出發時刻の十分前には出發側は勿論、見送り側に立つた田中幹事も、道路課から代表見送りの淺香內務屬も、改良會側の小島、上山兩氏の面々も東京驛のプラットホームに顏を揃へてしばらく賑やかな談笑を交し、時刻行先の高聲放送とシグナルベルの響きに車上の人となり『往つて參ります……どうぞお大事に』の聲に特急列車は帝都を後に軌り出した。

途中（十月七日）

富岳の頂上は既に雪の冠を戴いて居た、富士川の道路橋上には西から二臺の乘用自動車、東から三臺の貨物自動車其他が馳せ違つて居た、嘗て東海道國道の改良宣傳に來た時は（大正八年の十二月）貧弱な渡舟しか無かつたので、

自動車を富士驛から岩淵驛まで汽車で輸送したのであるが、今この情況を見て其の當時のことを思ひ出し、實に感慨無量であつた。大分竣功に近づいてゐる大井川橋の架設工事も車窓から壯大に眺められた、米原で山陰線の寢臺が取れた旨を鐵道から知らして呉れた、其の間に少しのエピソードがある、それは靜岡で食堂車から微薫を帶びて出て來た茂庭博士と佐藤幹事が、何か食後の甘いものはないかナァと例の健啖な所を發揮すると、乘り合した一美人が森永のデセールを一罐寄贈された、茂庭博士と佐藤幹事は盛んに頬張り盛んに談じて居た、兩君は有名なる兩刀使ひで歐米の旅行中も大いに其の兩刀の切れ味の冴えを活用したのである、が併し其の婦人が大津驛に下車すると蛾然車内は靜寂と沈默とを續けざるを得なかつたといふのである。其れからボーイの知らせで夕食のため一同食堂に入り京都に着いた時は、早や電燈が煌々と乘降の客を照らして居た。

山陰線は東海道線とは雲泥の相違で動搖甚だしく、眠れぬことが多いといふので、茂庭、佐藤兩氏は燒鯣と正宗を一本宛手にし、都筑幹事は病後のことゝて大分疲れたらしく催眠劑を頓服して直ちに寢臺に入つた、暫らくすると中川理事が種田虎雄（前鐵道省運輸局長）、齋藤眞澄（前鐵道省監督局長）等に送られて、同じ列車に這入づて來た、そして異句同音に山陰線の時間は誠に悪いといふ事を訴へた「ソレナラ何故早く鐵道在官時代に改正しなかつたか？　眼醒ることの何ぞ遲き」と寢臺車の一隅から小言を云つた者があつたけれ共、茂庭博士と佐藤内務技師兼鐵道技師が悪い時間といふに贊成を表した高聲に消され、種田、齋藤兩氏もこれには氣付かずして下車し、列車は西北の闇路を分けて進行した。

時間表の具合悪きは、今更何とも仕方がないので汽車の進むに委したが、併し『夜明け前に鳥取に着いたら先方で迷惑せう……餘り世話を掛けぬやうに』といふことに意見一致し、中川理事は鳥取から八驛先きの松崎溫泉まで行けば丁度夜も明けやうから一浴して飯でも濟まし、時間を計つて引返へすことゝなり、我々一同は中川理事と違ひ、鳥

取を通り越して先きに行くことは不經濟、且つ手數煩雜だといふわけで、鳥取より三驛手前の岩井溫泉に寄つて煤煙の爲、眞黑になつた鼻の穴でも洗ひ、縣廳や市役所其他に餘り邪魔にならぬ頃、今着いたといふ顏で乘り込むといふことになつて一同寢に就いた。

翌くる日（十月八日）

翌朝、中川理事は松崎溫泉に下車すると、藤岡同縣知事も鳥取は時間が早過ぎ官房や警察や何かゞ迷惑と思はれたらしく同じく下車するところで、思ひ掛けなき對面の場が演ぜられたのである、一同が揃つて鳥取驛に着いた時には縣廳から吉田內務部長、長谷川土木課長其他、市から市長助役其他多數有志の出迎へと、新聞寫眞班に襲はれて鳥取驛頭を賑はしたが、開會時間は午後六時との事ゆへ、一ト先づ旅館へ落ち着くことゝし自動車を鳥取溫泉ホテルに着けた。講演時間までは未だ二時間半あるので、都筑幹事は毎年出水に惱む袋川及千代川の現狀や荒木又右衞門の墳墓ある立忠寺、同義弟渡邊數馬の墓所ある興善寺や久松山にある舊城址等を廻つて見た、鳥取縣は面積の割に（因幡伯耆兩國で二百二十四方里）山と川とが多く、爲に道路が良くない、東方は兵庫縣、西方は島根縣、また南方は岡山、廣島兩縣に堺する山脈が、北方の日本海に向つて斜面をなし、中でも五千六百尺の伯耆大仙、六千百二十尺の三國ヶ嶽、以下二千八百八十尺の大倉山等をはじめ、扇山、陳鉢山、稻葉山、那岐山、鷲峰山、毛無山、歷史で有名な船上山等聳立し、この山峽から走り出て居る日野川、千代川、八束川、天神川其他多數の河川は、十年隔き位に洪水を放流するのでこれら各地方民は、かなり弱つて居る。以上の外猶途中に於て種々變つた見聞もあるが、それらに就ては武井幹事が改めて報導されることになつて居るから玆には省略する。

鳥取市に於ける講演會

朝來非常なる大雨で、今夕の講演會には聽講者が集まる

まいと心配して居つたのが、急に午後三時頃から、からりと晴れて肌障りも爽快な風さへ加はり、五時過ぎには早や道も半かば乾き講演會場（師範附屬小學校）は小學生で占領されて居るとの情報に接してマア宜かつたと思つた、旅舘鳥取ホテルから會場までは小一里あるので五時三十分自動車で出掛けた、聽衆は滿員の盛況であるが幼少年が其の八割を占めて居るので頗る賑かである、それは活動寫眞が主で講演の方は無代の附錄としか思つてゐない連中であるから已むを得ぬ。併し夫れでも聽講するといふ精神は殊勝であつて六時、吉田內務部長が壇上に起つて、鳥取縣に於ける道路交通の現在及將來に就て其の抱負を開會の辭に代へた約十八分間の挨拶中は、恰かも校長の倫理の教授時間の如く實に靜肅其のものであつた。次に佐藤幹事が『道路は一國文野の象徵なり』といふ演題で約三十分の間其の蘊蓄を傾け。次で武井幹事が『道路の改良と其の財源に就て』といふ演題の下に、雨が降つて天氣の惡いといふは道理に叶つて居るけれども、雨が降つて道が惡いといふことは世界的には通用しない、歐米文明國の道路は雨で洗滌され却つて奇麗になる、先き程佐藤幹事も述べた樣に野蠻な國ほど道路が惡い、野蠻國と申すのではないが山陰道の道路は隨分惡いといふやうに碎けた講演振りなので、幼少年も傾聽して居る。次に『道路の維持に就て』といふ題下に歐米其の他の例も加味して評議員茂庭博士が約二十二分の間講演されたが、幼少年は頭が既に講演といふよりは活動の方に移り出して騷々敷くなり、會場委員は之を鎭める爲、氣をいら〳〵して居た、博士に對しても氣の毒であつた。最後に登壇された中川理事は『將來の交通機關と道路の改良』と題して約二十八分の間朗々たる音聲で、我國屈指の交通運輸學者たる所を示した。それで長谷川土木課長閉會を演べ、終つて官民合同の歡迎會に臨み、知事の歡迎の辭に對し中川理事より謝辭を述べ、主客歡談午後十時半自動車に搖られて宿に歸つた。一方活動寫眞は八時十分にはじまつたので、都筑幹事は歡迎會場を中座して之れに臨み、貴き犧牲、或は國道工事等に關し、觀衆が不審の聲を發し又は難解らしい箇

所に補講を加へ、午後九時過ぎ東島、堀兩書記も來て會場を監督し同十時所定のフイルムを映し終り千餘の觀衆は多大の感動に打たれた、猶多數の希望により滑稽諷刺一卷約二十分を上映したが笑聲四方に起り、盛んなる拍手裡に初日のプログラムを終了した。

第三日（十月九日）

午前八時出發、中川理事、都筑幹事は知事官舍を訪うて挨拶を述べ、猶時間があつたので自動車を岩美郡宇倍野村に馳らせ、國幣中社宇倍神社にお詣りした、祭神は武內宿禰であつて、日本銀行兌換券五圓紙幣に福德長壽溫顏の肖像と、神社正面が描出されて居るので誰れでも知つて居るが實際に參詣した人は少ないやうに思ふから少しく說明を加へる、風土記に『武內宿禰ノ垂跡也、仁德帝治五十五年春三月御歲三百六十餘歲ニシテ當國龜金（稻葉山の中腹）ニ御下向シテノチ雙履ヲ殘シ、御陰所ツイニ知レズ』とありまた因幡民談記に依れば元龜天正時代迄は社領神田も頗る廣く、社殿も壯嚴であつたが、戰國時代に入りて屢々社領も侵され、遂に天正九年の兵燹に社殿も灰燼して、僅かに後阜龜金丘の雙履跡のみ依然舊の儘であると記してある、今は極めて質素な社殿ではあるけれ共、我國上世に於ける幾代かの帝政を補佐しまつりたる神靈に對し、敬虔の念と思慕の情は轉た禁じ得ざるものがあつた、中川理事は本會を代表して玉串を捧げ、九時半參拜を了して歸途に就く、都筑幹事は鳥取新聞記者三枝信二、因伯時報記者小島繁雄兩君と同乘したので、前夜の講演に對する批評を初め、縣內の交通狀況並に縣政の情態等を略々覗ふを得た、鳥取市は池田侯三十二萬石の舊城下であつて、市街は東西三十町餘、南北一里十町に達し山陰道屈指の都會であるけれども其の道路たるや概ね狹隘で見透し困難な變形屈曲路等あつて、現代交通に適應するものとは義理にも言へないが、餘り惡口を述べて長谷川土木課長から叱責されても詰らぬから成るべく書かぬことにする。

湖山から白兎までの道路も決して良くはない、けれども

南方に縣下一の湖水周回三里二十六丁の湖山池があり、湖上に月島、團子島、青ヶ岩、猫岩等を浮べ、國道を隔てゝ吉岡溫泉の上の湯（硫黃泉）下の湯（鹽類泉）を望み、また北は日本海の波濤を一眸の裡に收め右に鳥ヶ島、左に經ヶ島を控へ、沖合遙かに隱岐を隔てゝ浦鹽が見えると云ひたい程の好風景である。濱村驛の南方に鹿野の幸盛寺といふがあつて寺内に山中鹿之助幸盛の墳墓がある、賴山陽も左の詩を賦して快男兒幸盛の孤忠を稱揚して居る。

存孤杵臼何忘趙　乞救包胥暫托秦
嶽々驍名誰喚鹿　虎狼環境見麒麟

此鹿野の南方鷲峰山麓に悄然たる一城址がある、昔豪族鹿野氏が是に據つて、近郷に雄を誇つたのであるが、天文十三年に尼子氏の爲に落城し、後また龜井氏之に代つて領し一時は逢坂村八幡宮附近迄人家點接するの勢であつたが、有爲轉變は世の習ひ今では鹿野町からも離れた荊棘に埋もれて居る、車窓から鹽類泉で名高い濱村溫泉や弱硫黃泉の勝見溫泉等を眺めて進むと泊町の彼方遙に、青松白砂連り海波と相映じて小須磨の觀がある。

武内宿禰

縣下第二の湖水たる東郷湖（周圍三里）には先年迄多數の鶴が舞ひ降つたので一名鶴の湖とも稱し、水清く四顧閑雅であつて、湖心から湧き出るを淺津溫泉、湖東から湧くを松崎溫泉、湖南から出るを東郷溫泉といつて居る、前日藤岡知事と中川理事が期せずして對面した東郷溫泉は實に此處であつた。此日の晝飯は種々の都合で倉吉の手

前二里餘の三朝溫泉で午後二時半といふに、漸く膳に着くを得たけれども、突然五十人餘の客來に勝手元の豫算が外れ、飯が出たのは驚く勿れ三時半で、晝飯と夕飯との中間の變なものになつて了つた、其れで經濟上から割り出した譯でもないが、遂に夕飯抜きで宿も此處に取ることゝなつた。佐藤幹事は會て來浴したことがあるので說明の勞をとる、曰く泉質は炭酸泉であつてラヂウムの含有量正に東洋一であるから病後の快復には隨一であると都筑幹事に試浴を勸誘する、聞けば遠く讃州高松や九州島原あたりからも毎年澤山の來浴者が押し掛くるとのことである。まだ數十分の時間があるので、相國寺管主の別野を訪ふ、竹林を分け右に左に石階を登ること五十餘段にして、鐘樓を兼ねた山門がある、大きくはないが其の構造に至りては飛彈の匠を思ひ起させる、園內泉石配置の妙、俗を脫し幽邃閑寂である、管長は折柄京都在住の趣なるを以つて、直ちに辭して宿に歸り講演會準備にかゝる。

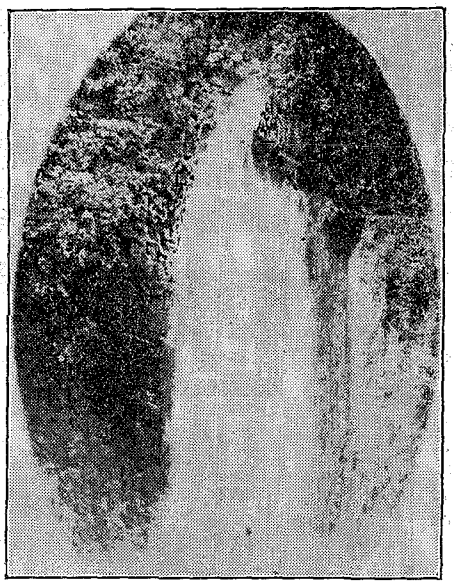
字倍神社正面

倉吉町に於ける講演會

午後五時自動車を倉吉町の講演會場に驅る、三朝川の流れに浴うて走ること一里半、大原より圓谷に渡り經藏寺道を二十町餘驅けた時の如きは、冷氣身に浸み一同の顏色蒼然たるには鳥渡……若しや……といふ豫感が起つた。

倉吉には天正年間南條氏居城し、後元和三年鳥取藩主池田侯の支城となり、市街も相當擴築せられ商工業も隆盛になつたやうである。今夕の會場に充てられた小學校の講堂

も地方には珍らしい程壯麗なもので、明治十八年の建築に係る西洋風二階建本校舍の如きも、今尙嚴として其の威風を山陰の天地に誇つて居る。午後五時半既に滿員となつたので、長谷川縣土木課長が壇に登り開會の辭に併せて縣下の道路交通と其の改良に關する意見を約十五分に亘つて述べ、次で前夜鳥取に於ける演題と順序を踏襲し、佐藤幹事の講演も漸く濟み將に武井幹事が登壇せんとする折、豫ねて東京出發前より胃腸を害して居られた中川理事が疼痛に惱むやうになつた、併し同じ經驗ある東島書記が鎭靜劑としてウィスキーを服用すれば直ると言ひ、一同も鍛井竹庵は却つて考へものであると頻りに勸めるので、直ちに人を馳せてウキスキーを購入し、極めて小量の服用なるも東島書記の言の如く須臾にして鎭靜し武井、茂庭兩氏の後を承け、前夜よりも却つて五六分長く堂々三十分以上の講演を濟された時に我々は『マア好かつた』と胸を撫でたのであつた、閉會の辭を近池町長が演べたのは午後八時で、其れから町主催の歡迎會に招かれた。折から舊曆九月十三夜の月光を踏みながら、昔上杉謙信も今夜此の月の下に『霜は軍營に充つるの詩を詠んだのか？　などと古今東西の文物事象を打吹公園の泉聲松籟に問いつ、應へつして歩むうち早や町歡迎の風月樓門前に着いて居た、この歡迎場は町でも屈指の建築であると運轉手等が話し合つて居るのを聞いたが、成る程扁額、軸物等も珍重すべきものがあつた。參集の有志も亦相當の學識及地位を備へたるに拘らず、盃盤



船上山麓千丈の瀧

を宰する窺妓等の無恥と素行とに至つては同地將來の爲、眞に惜しむところ莫きを得ない。

第四日（十月十日）

一天雲なく朝七時出發、赤崎驛の南方二里半にして有名なる船上山（海拔二千七十八尺）を望む、想ひ起す元弘三年春三月、國守名和伯耆守源朝臣長年（前名ハ長高ナルモ倫旨ニヨリテ長年ト改ム）後醍醐帝を奉じて、勤王の旗幟を高く飜し、以て大義の存するを天下に魁けて叫んだ偉蹟が指呼の間に陰顯して居る、其の舊跡は脊西の山腹に今尙「みかどやしき」と稱する緩斜面の廣大なる地域を存するのである、是より東方一里の神ヶ原には伊弉諾册命を祀れる船上神社があり、また附近に夏尙寒き雌雄の千丈瀧が瀑下して居る、名は千丈なるも實際は百間前後とのことである。

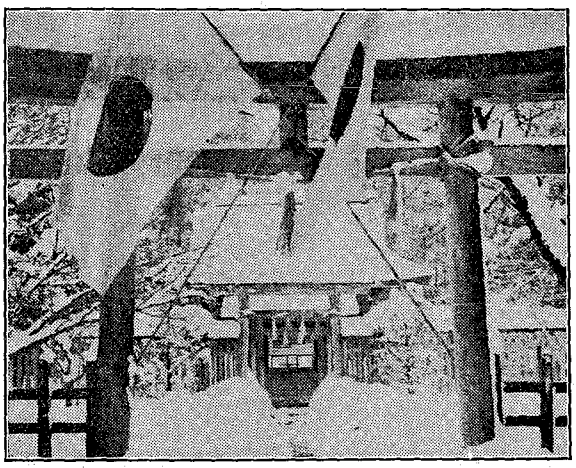
漠々天空近藹時　船上突兀玉爲肌
凍雲一昧前峰黑　尙見當年煤印旗

これ蓋し長年の弟、氏高が募兵策及防敵策として、白布五百反を旗に作つたけれども、旗色餘りに白く紙旗に似て居たので、松葉を燻して之れに古色を加へ、近國武勇の士の紋章を印したる智謀を謬つたものであらう。

後小松天皇の御宸筆が勅使門に揭げられてある有名な寺院を持つ下市町を過ぐる時、丁度十一時半の鐘といふのを聞いた、此古刹は下野國那須野ヶ原で九尾の狐を珠數で退治（今に現存する栃木縣那須野ヶ原の巨大なる珠數割石）た有名な玄能和尙が正平九年に創建したもので、また彼の土木工事等に必要なる玄能は實に此禪師の草案に成るものであると傳へられて居る。

十一時四十四分西伯郡御來屋町に下車して海岸に出で、元弘帝御着船紀念碑の前に整列し町長の說明を聞く、「元弘二年如月鎌倉將軍北條高時暴逆して、後醍醐天皇を隱岐の島に遷しまいらせた時、都から供奉したのは一條頭中將行房卿をはじめ、六條少將忠顯、富士名三位局、また御歲僅かに十六歲におはした皇女瓊子內親王（三位局の息女として扮裝ち）外に金五と云ふ仕丁、成田小三郎といふ雜色、

以上六人であつたが、皇女の供奉中に居ますことが途上に於て發覺し、御傷はしくも內親王は只獨り西方島根縣に近かき五千石村なる安養寺に幽閉され給ひ、後荒々しき賊徒の手により落飾せしめられ御名も遂に西月尼と改めて墨染の衣を纏はせられ、日夜御父陛下の御武運祈願に心命を捧げ給ふたので、神佛も其のいとしき御心根を愛でたまうてか、一旦建武の中興は成就したのであるが、月に叢雲花には嵐、再び南都の春競はず、御兄弟の宮の御武運を終日終夜祈り給ふ讀經三昧のうちに御齡二十四歳を一期として、鐘も凍る辟遠の山寺に雨と風との外訪づるものも絶えて無き悲痛なる御生涯を終らせたのである、叙上の始末で隱岐の島には一天萬乘の君主が只だ僅かに五人を供せられたといふことである。



別格官幣社名和神社

翌元弘三年二月九日夜の御枕に、御父後宇多天皇の靈告があつて、六波羅から隱岐の判官淸高が許に密使來り、機を窺ひて主上を失ひまつらん策謀あるを悟り給ひ、窃かに名和泰長（長年の弟）を御寢所近く召し寄せられ、汝急ぎ島を出でゝ義兵を提げ來り迎へよとの御詔を拜したので、泰長は畏こまりぬと奉答して直ちに富士名義綱と策を圖らし夜の明けぬ間に出で立つたが、途上波風荒くして漸く二十日の朝まだきに出雲の驪谷判官高貞の許に迎り着き、共に王事に盡さんと語い會つたのに却つて彼等賊手に囚れ、遂に自刄するに至つたのは眞とに遺憾の極みである。

されど天皇は閏二月二十三日夜竊かに、忠顯朝臣、富士名義綱、成田小三郎及金吾の四人を從へ、千波の港より脫

出し給ふたのであるが、翌二十四日の申の刻下りに隱岐判官清高が兵船數多追掛け來り、水夫等は色を失つたけれ共、主上は御聲いと朗かに、『愚かなる賊共怖るゝに足らず又賊中にも大義を辨へる者莫きに非らず汝等勤ずるなく釣してあれ、身は暫し潛まん』と宣まひければ、人々皆御諚の如く釣するうち、賊船進み近きて覓むれども頗る小形の漁舟なれば對して疑はず其儘漕いで行つたといふことである、翌二十五日に出雲の國野波浦といふに着き給ひ、直ぐに地頭を召されたけれども、微力にして兵糧の貯へ等も無き由を申出で干鰯三叺を奉つたので、翌二十六日更に佐陀の浦から江積に上陸せられ、主上は駒に召され出雲の杵築に向け五六丁餘りも進ませられたのであるが、早くも佐々木清高の賊勢五百騎餘りが向ふからやつて來たので主上には並樹陰くれに駒を返させ給ひ、再び舟に召されて翌二十七日杵築に着御、義綱、金吾二人先づ上陸して、水と米とを求むるうち賊徒に捕へられ、御舟亦將に危險となつたので忠顯朝臣は赫怒し一矢を執つて猛威を示し賊勢一時ひるむ間に、舟を漕出して厄を脱がれ東を指して進まれたのであるが、一難去つて又一難、大義を辨へざる國造等大船にて追駈け來り危難刻々に迫る、天なる哉運なる哉、風浪荒れ日は沈みて暗く、船大なりと雖も海洋の大に比れば物の數ならず、痛快にも奔弄され盡して賊船美事に覆沒したのは是命であらう。御舟は翌二十八日朝風の稍々靜まらんとする頃、伯耆國片見の浦を東に向つて居たのであるが、折から昇る旭日は滿天を紅に染めたので、天皇は我事成ると喜び給ひ、急ぎ名和の浦邊に漕ぎ戻せと宣ふ折しも、再び寄せ來る隱岐の判官が兵船數隻、櫓聲營營と犇めき渡るも、英明の君主騷がず、敏俊なる忠顯朝臣驚かず、直ちに船底に潛ぐりたまい、滿五日の海風に顏も五體も赦く腫れ上りたる小三郎は鬢髮生いて生來の漁夫にも劣らず側近に奉仕せし者とも見え難くなりたるを幸ひ、平然自若主上の潛みませる上に苫、和布、干鰯等を置きて、わざと判官の舍弟能登守が指揮する船と、其の舍弟三河守が乘込める船との中を愚直なる顏して行くを、左右の大船より見れば僅

かの小舟にて人の隱れたる樣子もないので、「斯々の舟を知らずや」と口々に問ひかけるを小三郎得たりと、然る舟は早や夜明前に東に急ぎ漕ぎ行きたれば今頃は半七さん何處に如何してと濤の音櫓の音に漕ぎ混ぎらし答ふれば、左らば急げと舳櫓哺みて東方に力漕し行くぞ蓋し天の戲らであらう、御舟は西に漕行きて半時あまりも過ぎたる頃、主上には水を聞食と宣ふに皆の者も豫て渴を覺え居たることゝて舟を浦邊に着けたるが卽ち此御着船所にて、忠顯少將は水求めに、成田小三郎は直ちに勅を齎らして長年の館に向つたのである。

長年は卽ち席を下りて畏まり急ぎ馬を馳せて磯邊に到り跪きて龍顏を拜するに、水さへ盡きて日々の供御も定かに聞食されず、御目も凹み御衣の袖も千切れ、一天萬乘の帝に此御歎きを懸け奉りて臣節何處にか在ると切齒落涙すれば、主上も亦御目霑ませられ、後より御迎ひに續ける名和家の勇士も皆泪を押へて、王事に對しては九族の身命を捧げ奉らん、若し戰つて屍を山川に曝すことあるも是れ後世への敎訓に候と申上げ、聖明對誠忠の氣は凝つて名和の自邸をも灰燼し船上山の旗揚げより……建武の中興を成就したのである。

既に午餐の用意は出來たけれども、此忠臣諸公（長年以下四十二柱）を祀れる（別格官幣社）名和神社は僅々數町の丘上なれば急ぎ詣りて神靈を慰め奉つた。

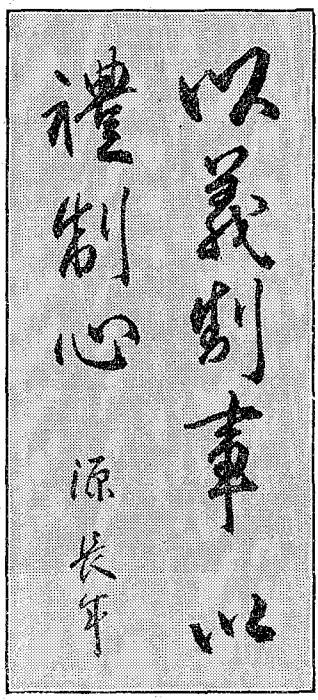
御製　忘れめや　よるべも波の荒磯を
　　みふねのうへに　とめしこゝろを

の御歌と『以義制事、以禮制心』といふ長年朝臣の親筆とは、實に此鳥取縣を精神的に敎訓的に歷史的に飾る寶物であらうと信ずる。

夫れより村谷町長の案內で後藤旅館に立寄り午餐を喫して出發し、今夕の講演地米子市に着いたのは零時四十五分であつた、市內到る處に道路改良或は道路愛護等の文字を揭げた歡迎門が種々の意匠を凝らして建てられてあつた、聞けば今春漸く市制を施いたに過ぎぬけれど、今や既に山陰第一の人口を抱擁するに至り、逐日隆盛に赴くと共に道

路交通の問題に就ても、覺醒して來居るとのことである、猶講演時間までは餘程時間があるので、島取縣の一等道路（米子――境港線）といふを視察した、境港は目下內務省の直轄工事として築港中なので太田主任技師に就て其の實施狀況を見せて貰ひ、其の序でと云つては失禮であるが、對岸なる國幣中社美保神社に參拜した、世人は『關の五本松一本伐りや四本、あとは伐られぬ夫婦松』の歌で、美保ヶ關の人は粹だナァ位は知つて居るけれども、我が建國の古へに、大なる敎訓の嚴として輝くものあるを知る人は或は尠いかと思はれるから少しく之を述べやう。

抑も大國主命と少名彥命とは提携して中水門（なかんえなと）（馬關海峽）から角鹿（つぬが）（敦賀）に至る間の開拓を主宰せられ、大國主命は其の餘力を以て日韓貿易に向けられて居たことは第一藥物、第二燃鍊具等の點に於て立證されて居る、そして大國主命の御子たる事代主命は、此美保ヶ關を根據地として北陸道の開拓に向かはれ、命の出張中は御義母神たる三穗津姬ノ命が出雲の杵築から此美保ヶ關迄來られて、兵站部の宏充を劃して居られたのである。

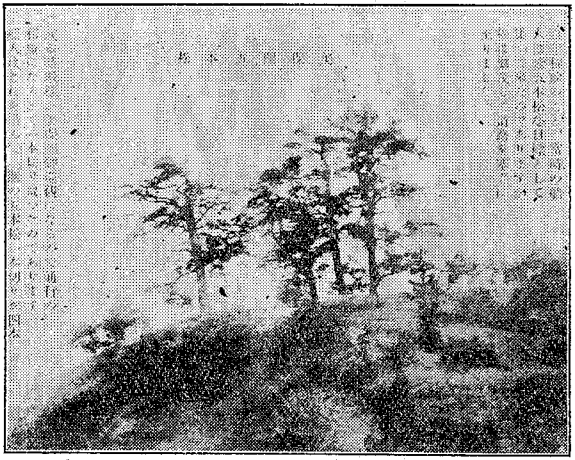


名和長年の親筆

然るに一朝天孫降臨の神使に接するや、命は言下に『父大國主神既に夙やく天祖の大詔を遵奉せり、吾れいかでか奉らざるべき』と恭順して國土を返上し奉つたので、神使は慇懃に禮を厚ふして天の鳥舟に乘り靑天に入つたと言ふことである。『按ずるに天の鳥舟とは帆掛船か或は航空機のやうなもので靑天に入られたとは水天一髮の線を通過したことであらうと思ふ）卽ち天祖に對し奉りては忠、御父神に對し奉りては孝、之によりて大義の存する所、名分の別

るゝ所を明かにし、以て忠孝兩全の大道を踏み、建國の基を固め、萬世一系の寶祚を護り給へる宏大無邊の神德は、誠に天壤無窮の洪範と稱すべきであると信ずる、その事代主命が卽ち此美保神社に祀られ、また同社域內に義母神三保津姫ノ命も祀られてあるので、實に美保ヶ關は拓殖出張所の開祖として、蠻地需給品整備所として、また忠・孝・仁・愛の發祥地として、卽ち建國の基本的條件確立の敎訓地として忘るべからざる處なのである。

市街は恰も水上に浮べるベニスの如く倒影を靜かに水に映して居るから、夜景の美は定めし一入であらうが、早や午後三時を報じたので纜を返へして築港主任太田技師と別れ夜見ヶ濱の直線を驀地にドライブして今宵の旅館たる靜養館に車を着けた、都筑幹事は縣及市の技師其他委員と同乘して、米子市內外に道路改良に關するポスター撒布旁々講演會場や道路交通の狀況視察に出掛けたが、生憎雨になつたので約一時間で引上げ午後五時十分歸館した。

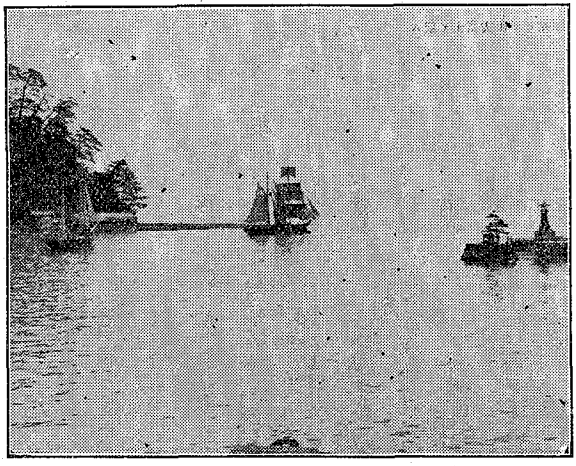


關の五本松

米子市に於ける講演會

午後五時三十分（十月十日）皆生松原を後に講演會場に向ふ、皆生松原は前面海に臨み白砂靑松の間に大道を通じ、恰かも千代の松原（福岡縣）を小規模にし之れに溫泉を加へたやうな趣がある、嘗ては幾十かの歌妓も集くつて居たが、三業組合の鼎裂から、今は弦聲喃歌の跡を絕ち至純なる氣分の漂ふ所である。同六時講演會場たる啓明小學校に着く、米子は一般にスポーツ熱に燃えて居る由を倉吉で聞たが、今實地に臨んで夫れが

話以上なるに驚いた、阪神や京濱の小學校でも見たことのない種々の運動具や、金銀のモールで飾つた優勝旗などが十數旒樹立して居る、講堂の如きも設備が行き屆き各講師の演題等も順序よく掲げられてあつた、又屋外には雨が愈々本降りとなつて來たので今晩の聽衆は皆よく落着いて居る、それで前日來風邪の爲に咽喉を痛め心配して居た佐藤内務技師の嗄れ聲も、茂庭博士一流の綽々然たる低聲も、武井内務事務官の滾々として玉手箱に似たる講演も、皆よく後方まで聞える。鳥取でもまた倉吉でも講演中に欠伸したり居眠りしたり逃げだしたり或は私語き合ふ者尠からず、其の不作法には呆れたのであるが、今夕の聽講者は有繋に新興市民だけあつて、よく傾聽して居る。會場は斯く都合好く往つたが、翌日の汽車時間打合せの爲、午後六時米子驛に行つた堀書記が、一時間經つても一時間半經つても歸つて來ぬので、谷口所長が驛迄迎ひに行つたところ一時間位前、既に歸つたといふので、今度は宿に歸つたのか？　も知れぬと長谷川課長が電話で聞き合すと、誰方もまだお歸りはありませぬとの事で、講師控室では一同心配したのであるが、東島書記も一緒に行つた筈であるから迷子になるやうなことは無からう等と話して居るうち、二人共無事な顔を見せたので安心した。尙ほ念には念を入れる必要があるといふので谷口所長が、再び驛に打合して呉れた。それから前夜倉吉で中川理事はウイスキーを藥用として頓服されなどしたが、今晩は最も元氣に、眞打ちとして登壇し、將來の交通機關と自動車及道路に就き堂々三



美保關の風光

十五分に亘り其の蘊蓄を傾倒した時の如きは水を打つたやうに靜肅であつた。午後八時十分西尾米子市長が閉會を宣し、それから市長主催の歡迎會に臨み、同十時半豪雨降る中を自動車で無事宿に歸つた、山陰でも早や自動車實用の時代に入つて居る。速かに道路の改良を計らぬと、日進する文明に置いてけ放りを喰ひ、後年の嗤笑を免がれまいと思ふ、須らく當局者の緊褌を要する時であらう。

活動寫眞は京濱模範國道工事中の實況を皮切とし茨城縣下に於ける簡易鋪裝道路、阪神十五間道路、箱根山中に於ける改修道路等より、實說貴き犧牲の映寫に入り、滿場感動の裡に午後十時所定の映寫を了つたけれども、尚ほ多數の希望によつて、歐米先進國に於ける交通狀況一卷と、滑稽諷刺物一卷の特別映寫をなし、午後十時二十五分、急霰の如き拍手裡に鳥取縣に於ける最後のプログラムも非常なる盛會を以て終了した。

上野驛の混雜に
新しく交通整理

バラック姿の上野驛前の廣場は、一方に地下鐵の工事があり、他方には高架線の工事があつて足元頗る危險な處へ、各列車發着毎に圓タク數十臺が梭の樣に走り廻り、更に鐵道省の手荷物輸送のトラックが唸つて走るので、步行者はとても危險で步くことが出來ないばかりでなく、日に二三度は事故を生ずるといふので、上野驛では早くから交通整理の必要を感じて居たが、いよ〳〵年末も差し迫つたので、應急の處置として現在空家となつて居る、新ガード下を手入して、手小荷物集貨配達扱所として鐵道の貨物自動車は同所に出入させ、圓タクは別に通路を定めて步行者の安全を計ることゝなつた。